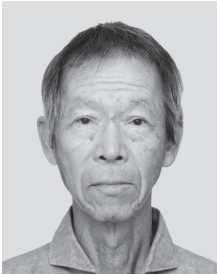


—海外で活躍する獣医師 (V)—

海外での獣医師としての経験

岩瀬慎司[†] (NPO法人いきいき畜産ちばサポートセンター・
農場 HACCP 指導員)



私は 1972 年 4 月に千葉県農業
共済組合連合会に就職して 3 カ月
の研修を受けた後、7 月から安房
地区家畜診療所平郡出張所に配属
されて臨床獣医師として働き始め
た。それから、2005 年 3 月に退
職するまで 33 年間、6 カ所の診
療所に勤務した。その間とその後

に海外で仕事をした経験をお話する。

世界牛病学会参加

初めて獣医師として外国へ行ったのは、1990 年 8 月 13 日から 17 日にブラジル国バイア州サルバドールで開催された第 16 回世界牛病学会の参加であった。学会には世界各国から獣医畜産関係者が約 1,000 人集まり、演題数は約 200 題であった。私はこの学会で口頭発表をした。発表した演題は「活性炭の経口投与による急性第一胃拡張症(盗食)の治療」であった。牛舎に繋がれていた牛が離れて飼料袋の大麦や配合飼料を飽食、いわゆる盗食した結果、起立不能に陥り、廃用または死亡に至る時の治療法である。原因は盗食によって第一胃内が急激に酸性化してグラム陰性菌の死滅で牛にショックを起こすエンドトキシンが発生するためである。それまでは大量の補液と胃洗浄を行う治療をしていた。その治療は数時間に及び胃洗浄で回収した胃の内容液は一升瓶で十本以上のこともあった。当時、仲間の獣医師と一升瓶十本取ったなどと自慢しあったりした。しかし、この治療で活性炭(冷蔵庫の脱臭剤)を 300~500 kg 投与してからは起立不能で意識もなくなった牛が半日もするとなんともなかったかのように立ち上がって元気になった。活性炭が乳酸によって低下したアシドーシス状態を改善し、第一胃内が正常化するためである。それを発表するためにブラジルで行われた世界牛病学会に参加した。英語の発表は原稿を見て読めばいいが、その後、質問が



図1 ベルー・マチュピチュにて

出たらどうしようかとハラハラしていたが、質問は一つだけで、どうにかうまく答えてほっとしたのを覚えている。残るは、ツアーの仲間と晴れて観光である。だが、私の発表が最後の日だったので私一人置いていかれて、ツアーに合流するために、追いかける羽目になった。ポルトガル語は分からずタクシー運転手にはタクシー代をぼられるは大変な目であった。やっとツアーグループに追いつき世界三大瀑布の一つであるイグアスの滝とペルーの標高 2,430 m にあるマチュピチュの遺跡を見ることができた(図1)。一日以上かけて着いた、二度と行けない地球の反対側の国での観光は素晴らしい思い出となった。

中国の鹿泉市酪農家との交流

2000 年 2 月から北京から南方 300 km に位置する中国の河北省鹿泉市銅冶鎮南銅冶村の酪農家及び三鹿乳業会社と交流し始めた。この交流は、日本の農文協(農山漁村文化協会)の「鹿泉市酪農発展協力事業」の企画で、故 渡辺高俊先生の二本立てエサ給与法を中国に紹介するために行われた(図2)。渡辺高俊先生は私の初任診

[†] 連絡責任者: 岩瀬慎司(千葉県畜産協会衛生指導課)

〒260-0021 千葉市中央区新宿1-2-3 (K & T 千葉ビル 3F)

☎ 043-242-5417

E-mail: keishinsono@hotmail.co.jp

療所があった千葉県安房郡富山町平久里に住んでおられた。私が赴任した1972年当時は二本立て給与法を確立する最終段階の時期であった。1970年代後半には千葉県の安房地方をはじめ全国各地に二本立て給与法普及に向けて講演に出かけていた。二本立て給与法とは「基礎飼料」粗飼料、「変数飼料」濃厚飼料の二つのエサを1頭1頭の乳量に応じて組み合わせて適切に設計してエサを給与する方法だ。安房地区には二本立て研究会があり若い酪農家が定期的に集まって先生の指導を受けていた。2000年から始めた中国の酪農家との第一回交流には渡辺先生はすでに亡くなっていたので、この安房の研究会の会員の酪農家2名と長野県の故小沢禎一郎さん、獣医師2名、事務局、通訳、計7名が参加した。長野の酪農家の小沢さんをご自分で二本立て給与法を実践して、渡辺先生が全国で二本立て給与法の講演や、普及活動の際に大変協力され、渡辺先生が亡くなった後はご自身で二本立て給与法の普及活動を行っていた。私の役目は千葉共済の診療所で学んだ牛の直腸検査技術を用いて当地の牛の繁殖障害の診断や妊娠鑑定をしながら二本立て給与法の紹介の手伝いをするのであった。第一回の訪問では私は26戸の酪農団地の中にある乳業会社が建設した片側60頭で尻合わせ120頭の搾乳施設に集まった牛

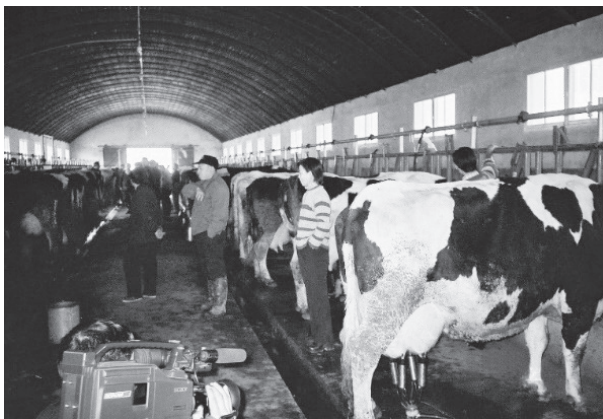


図2 三鹿乳業会社の共同搾乳施設



図3 人でいっぱいの講習会風景

の直腸検査をした。授精後40日前後の妊娠診断をする酪農家は驚き、他の酪農家もうちの牛も見てくれと引っ張りだこになった。翌日開かれた酪農講習会には早期妊娠診断が評判になって(たぶん)予定の倍以上の200人を超える人が集まり会場は熱気に溢れた(図3)。

この中国交流は2002年11月までの間、8回行われた。最後の訪問では中国語版の『牛乳量20%アップの二本立て飼養技術』(VCD付)(一部私も執筆)の出版記念の講演会を鹿泉市と北京市で開き、鹿泉市では300人以上、北京市では60人が集まった。環境は違っても動物の生理に違いはなくどこへ行っても獣医師としてできる仕事はあり、それを求める人がいた。

JICAの短期専門家として

2000年10月10日から12月9日までJICA海外協力事業の短期専門家として中国天津市乳牛改良育種センターに滞在した。天津市での国際協力事業団(JICA)の事業の歴史は古く、中国政府による天津市における酪農業振興モデルの形成を目的としたプロジェクト方式の技術協力の要請によって1990年3月から5カ年の「天津酪農業発展計画」が実施された。しかし、この5年間では事業目的が達成できずさらに引き続き2カ年のフォローアップ協力が行われ、1997年に一旦終了した。さらに、この時期の中国での牛乳、乳製品の需要増加及び乳質に対する要求の高まりによって①乳牛の改良手法の改善、②乳牛の飼養管理の改善についての技術の普及等を目的とする2年間のアフターケア協力の要請があり、この事業に私は2000年10月から参加した。1999年の天津市に酪農は表のような状況であった。

私の担当は非伝染性繁殖障害の防除技術の改善がテーマで、天津市酪農の発展のため、国営農場、個人の酪農家の技術者に以下の技術指導をすることだった(図4、図5)。

1. 現地セミナーで、スライドとと場臓器(生殖器)を用い早期妊娠診断法。
2. 現地セミナーで薬理作用を説明、牧場巡回時、実

表 天津市の酪農状況

| 区分 | 牧場数 | 繋養頭数 | 経産牛の繋養頭数 | 生産乳量(トン) | 経産牛1頭当たりの平均乳量(kg) |
|------|-------|--------|----------|----------|-------------------|
| 国営牧場 | 24 | 12,016 | 6,921 | 42,996 | 6,212 |
| 集団牧場 | 2 | 463 | 372 | 1,477 | 3,176 |
| 個人牧場 | 1,015 | 22,296 | 15,794 | 86,693 | 5,489 |
| 合計 | 1,041 | 34,777 | 23,087 | 131,166 | 5,681 |

平成12年6月国際協力事業団中国天津酪農業発展計画アフターケア調査団報告書より



図4 天津市で行った現地セミナー



図5 雪の降る中に行った牧場での直腸検査講習

際に現場の人工授精師、獣医師によるホルモン剤の使用法。

3. 現地セミナーにて千葉県での実施した成績を報告、各農場の巡回時に再度紹介。
4. 各農場でカウンターパートと人工授精師と直腸検査の手合わせ。
5. デジタルカメラで撮影した直腸検査の手技についてパソコンを用い農場での解説。
6. 農場の給与飼料の品目を聞き取り、中国の飼料分析表、飼料計算法について調べ、実際の応用法を検討。その結果、セミナーには延べ150名ほどの人の参加があった。

繁殖障害に対応するうえで、直腸検査は安価で実用的、また維持費もかからずすばらしい方法である。繁殖障害の根本には栄養が大きく関わっていることから、直腸検査による治療と指導とともに、それに関連する泌乳レベルの向上に対応した栄養面からの飼養管理技術者が必要であった。

中国の山東省で牧場建設と牧場運営に携わって 転 職

2004年の暮れに中国の河北省鹿泉市酪農指導でお世話になった小沢禎一郎さんから連絡が入りアサヒビール(株)が中国で農場を始めるので酪農部門を手伝ってもらえないかとの話があった。千葉NOSAIでの定年2年前の時期である。アサヒビール(株)がなぜ中国で農業を?と思った。この話は当時アサヒビール(株)の相談役だった故瀬戸雄三氏の肝いりで進めている事業だった。瀬戸氏は1992年に社長になられ、その後、「スーパードライ」でアサヒビール(株)をビール業界トップにした方だった。さらに、日中、日韓の友好にも熱心で中国の食生活の向上と農業の課題解決に貢献するとの信念で中国山東省に循環型農業の農場経営モデルを立ち上げる事業を打ち出した。アサヒビール(株)にとっても農業事業は初めてのなので

ハウスでのイチゴ、野菜栽培、酪農の3部門について外部のアドバイザーを依頼、そして具体的に農場建設事業が動き始めた。その酪農部門のアドバイザーが小沢さんだったので私に酪農をやってほしいと声がかかった次第であった。私は獣医師として一度牛を飼ってみたいと思っていた。そんな機会が突然やってきた。しかも牧場の立ち上げからで、そんな機会はまだ二度とないと思い、それで翌年の3月に退職することに決めた。われわれ診療所の仕事は地域の家畜の頭数に応じた獣医師数で毎日の往診に対応している。一人欠員になると補充がなければ他の人の負担が増える。退職には上司の承諾も得なければならない。翌年の3月までは退職のためにエネルギーがいる長い期間であった。2005年3月にアサヒビール(株)の担当者の方が中国での農場開設の説明と酪農部門の依頼で私の自宅まで来られ、正式に就職が決まった。

2006年4月に中国の山東省に赴任するまでの間、浅草のアサヒビール(株)本店に勤めることになった。混んだ電車による片道約2時間の通勤は大学を卒業して初めての経験であったが、どうにかこうにか務めた。この約1年間は、その後の牧場及び牛の管理について知識を得る貴重な時間となった。日本各地の牧場を見学し、酪農家から牛舎施設、関連施設の良し悪しや牛の話をお聞きした。また、中国でのこのプロジェクトの出発点となる農場建設地の選定と最終決定がこの年に行われた。

農場建設地の選定と酪農施設の建設

この事業はアサヒビール(株)の瀬戸雄三相談役が山東省のトップとの約束が発端で始まったので、山東省内のどこかに農場を建設することになっていた。中国の一つの省の山東省といっても人口が9,000万で面積が15.6万km²、青森県から愛知県位までの広さがある。山東省側からの推奨地はわれわれが行った現地調査でその周辺の問題環境が明らかになり、再度の候補地探しとなった。その後の候補地も二転三転し、建設予定地の決定は1年

以上遅れて2005年11月となってしまった。最終的には2005年11月に4カ所目の候補地で青島市と烟台市の中間にある萊陽市に決定した。そこに約100haの土地を借りることになった。この土地には5つの村にかかっている。農家戸数は約800戸あり、一戸当たりの平均農地面積は2ムー弱(12.50アール)だった。800戸の農家との借地契約は各村の合作社が行い、市政府が取りまとめた。次は農業施設、事務所等の建築だった。ようやく2006年4月に中国での会社が設立できた。会社の名前は朝日緑源となった。

牧場設計

100haの敷地内の20ha弱の丘陵地に酪農、事務所、宿舎、研究施設と野菜の選果所を作り、残りの平坦地にイチゴハウスと野菜や飼料用作物を作ることになった。これは20年の契約で、その後は元の状態に復元して返還するようになっていた。ようやく酪農施設の設計、建設の開始である。実は酪農施設を設計するのは私にとって初めての経験であった。このプロジェクトでは小沢さんと私の二人以外は酪農に関しては全て素人であったため、全て私に任せてもらい自由にデザインすることができた。そこでまず考えたのは牛にやさしく、牛が自由に動き回れる牛舎を作ることであった。その結果、1パドック40m×100mに100頭の牛を入れ、搾乳牛1,500頭が飼える牧場のデザインを作った。一つのパドックには飼槽部分に屋根と6mの幅で長さ100mコンクリートを敷いた。また、飼槽の反対側にベッドとして使えるように約3m幅の日除け様の屋根を張り、床は一段高くして砂を敷いた。飼槽とベッドの中間部分は土のままの状態で運動場とした(図6)。せっかく作ったベッドだったが、残念ながらそこに寝る牛は数頭だけだった。牛舎施設設計に100点満点はなく、その後いろいろな問題が持ち上がることになった。搾乳設備をどこのメーカーに発注するかは建設開始直前まで決まらず、日本で



図6 広々とした牧場で草をはむ牛達

準備していたスウェーデンの搾乳機器の会社にすると私は決めていたが、最後に逆転劇が起きた。

飼料の確保：サイロ建設とサイロ詰め

牛が来る前に準備しておかなければならない一番大事なことがあった。それはエサの確保だ。2006年にトウモロコシのサイレージは確保しなければならないと決めていた。それにはトウモロコシを貯蔵する入れ物のサイロを作らなければならない。高さ3.4m、間口12m、奥行き25mのバンカーサイロ13基の建設だ。間口は全長156mとなる。サイロは農業部門の建物で最終的に中国の設計院が認めて国の許可がおりて、建築ができるようになる。出来上がった設計図を見て驚いた。一基のサイロのなかに600t余りのトウモロコシが中に入ることになるので、その重量に耐えられる壁を作る必要があり地上3.4mに対し地下にもそれに近い深さの基礎が必要だった。当然建設費も膨大な費用となり、全部で約150万元(2,170万円)余りかかってしまった。建設工事はその年の7月中旬から開始してどうにかトウモロコシを集める時期の9月に完成した。この付近の一般的な農家はトウモロコシを春に植え、秋に収穫して、その後小麦を植える二毛作体制をとっていた。通常、トウモロコシは実を取った後の茎は冬の燃料にするぐらいで利用価値の少ないものだった。その茎が1kg0.06元(当時1元が14.47円で1kgが0.84円)で売れるとしたら、今までお金にならないものが小遣いになる。そのチラシを近在の村に貼り、村長さんにも宣伝してもらった結果、必要量を確保できた。トウモロコシサイレージは飼料設計で最も良い粗飼料である。3年後には周辺農家と栽培契約を結び、栽培するトウモロコシの品種も飼料用となりサイロもさらに5基増やした。

ニュージーランド(NZ)牛の購入

次に必要なのは主役の牛だ。中国にもホルスタイン種乳牛はいて、買うこともできたが、やはり伝染病が恐ろしく、オーストラリア(AU)とニュージーランド(NZ)から買うことにした。近い日本からは牛は中国側の防疫上の措置が理由で買うことができなかった。アメリカも同様だった。中国では2000年以降に酪農が盛んになり2005年に第一時期のピークを迎え、その当時、中国ではAUから3,000頭規模の輸入が各地で盛んに行われていた。朝日緑源としては800頭搾乳から始める計画であった。輸入業者は2,500~3,000頭に頭数がまとまらなければ、船をチャーターできないので、他の輸入希望の牧場とまとまって3,000頭になるまで待つことになってしまった。そんな時に飛行機での輸送があると紹介があった。私たちが希望している牛は妊娠牛で、1頭の体重が350~500kg、1チャーター便では200頭運べると

のことで、400頭を希望して2便で運べるようになった。話が決まったのは2006年10月のこと。2005年7月から輸入方法を探し始めて1年以上かかってしまった。NZにはまず牛の下見を兼ねて妻と一緒にいった。本番の牛の選抜は翌年2007年1月7日にオークランドに到着して始まった。あらかじめNZの輸出業者が各牧場を回ってこちらの希望に該当する候補牛を選んであり、その牛を私が見て、最終決定した。NZからは400頭買うことになっていたの、そのため業者は、その頭数の約100頭近く余分な候補牛を用意してあった。それらを一頭一頭見て選別していった。その時は診療所時代の牛の共進会やBWショーでの牛の見方が役に立った。中国政府は相手国に対して30日の検疫期間を設けている。ちなみに日本政府はNZでの出国検疫期間は少なくとも7日である。余談になるがNZは細長い二つの島からなっていて、日本と似て海に沿った道と山並みが続く島の中心部の道がある。どちらも綺麗で道路も家並もすばらしく、羊がいたるところで放牧されている。南の島の海岸線ではオットセイが見られ目を楽しませてくれた。また、道路脇の小さなお店では大きなロブスターを売っていて、半分に割ってもらい、町のパン屋さんの庭のテーブルでお腹いっぱいになるほど食べたのは忘れられない思い出になった。

ニュージーランド (NZ) 牛の中国到着と牧場到着

NZ牛は現地での検疫を終了して、第一陣は2007年3月28日に200頭が上海から少し南の寧波飛行場に到着した。寧波飛行場では牛の到着は初めてのことで、報道関係者、検疫関係者、飛行場職員と牛の数より多くの人が見守る中、貨物輸送の大型機が着陸した。第二陣はそれから6日後の4月3日に同じく200頭が同じ飛行場に到着した。牛たちにはこれから中国での45日間に渡る隔離所での検疫が待っている。日本の場合係留期間は偶蹄類で15日間である。その牛の妊娠鑑定を到着してから1週間以内に行わなければならないので、泊まり込みで私は寧波に行った。隔離所内での400頭の直腸検査による妊娠鑑定の結果、2頭が妊娠していないことが分かった。検疫のための隔離期間を終了してようやく牛が寧波から山東省のわれわれの牧場に運ばれて来た。1トラックに20~30頭積みまれ十数台のトラックが連なって972 km、10時間以上の長旅だった。第一陣が3月28日に中国に降り立ち、54日後の目的地到着である。NZの2007年2月26日の検疫開始から数えると実に84日となる。無事とは言えず輸送中に1頭が死亡した。牛はトラックから降ろされると群れをなして、一斉に走り始める。NZ以来の国は違うとはいえ土の上だ。嬉しい時には後ろ足を蹴り上げるようにして走り回る。こちらにもその喜びが伝わってくる。全頭が降ろし終わ

り職員の顔も緊張がゆるみ、嬉しさがこみあげてくるのが分かる。最後に2日前に隔離所で生まれた子牛を隔離施設に住み込んだわが社の獣医師が抱きかかえて運んだのが印象深かった。今まで人間だけだった職場に他の生き物が加わると世界が一転する。働く人間に活気が満ち、お互いの会話も運ぶ。生き物の魅力である。

オーストラリア (AU) 牛の購入

北京の乳業会社がAUから2,000頭余の乳牛を輸入するので、うちの牛も同船させてくれると言う良い知らせが輸入業者から入った。まさしく渡りに船だ。私はNZの牛が到着して1カ月足らずの2007年5月14日にAUへ牛の選抜に出かけた。今回は中国人の若い獣医師と二人である。AUでの選抜はNZと全く違っていった。まずAUの輸出業者は凄い大きな会社であった。日本の農協のように金融、不動産、購買、販売、農村サービス事業を手掛けている大多角経営企業である。この年2007年のAU南部はひどい早魃だった。AUは放牧酪農である。彼らにとっての酪農の成否は草づくりにかかっている。乳牛の評価の一つに1頭当たりの乳量があるが、AUの酪農家は草地面積1エーカー当たりの乳量を重要視するほどである。私達は早魃で牛を淘汰した後のそんな時に牛を探しに行ったのだった。400頭選ぶ予定が300頭にもならない。そうなると思った牧場でどうしてもふるい落とす牛を少なくしようと気が働く。これが後になってひどいことになるのだった。牛を選抜する際に乳房がすでに大きくなっている牛が何頭かいた。今回は船便のため、AUの検疫開始からわが牧場に到着まで3カ月以上かかる。その間にお産をしてしまうのではと疑った。最終的にAUの検疫所に入った牛は私達の分の283頭と北京の会社の分を含め合計2,343頭であった。これらの牛が7月23日に検疫のためにAUの隔離所に入り、船積みされたのがちょうど1カ月後の8月23日、中国の天津港に着いたのが9月7日のことである。私達の牛は検疫でさらにふるい落され262頭になっていた。前回の飛行機便と違い、船便は牛にとって過酷なものだ。経験したこともない赤道直下の熱い地帯を通り、波に揺られ15日かけて運ばれるのだ。さらに天津港に着いてから、また、45日余の検疫が待っている。隔離施設は天津市の郊外にあり、その隔離施設に私はまた妊娠鑑定のために入った。隔離施設なので、もちろんその中に入るには裸になってシャワーを浴び、支給された衣服に着替える。その中の部屋は、二段ベッドが三つ三方の壁にくっついておかれ、真ん中に少し空間があるだけの狭いところだ。私が行った時は雨が多く、じめじめして人間が住むところも、牛がいるところもかわいそうな状況だった。私は従業員用の6人部屋の二段ベッドに泊まったが、あまりのひどさに仕事を1日で切り上げ、早々に退散し

た。結局 AU 牛の輸入は散々な結果となってしまった。天津に到着した 262 頭の牛の内、検疫中に、3 頭が死亡して、48 頭が分娩してしまっていた。牛の価格は NZ 牛が 1 頭 22,000 元弱、AU 牛が 18,000 元であった。その当時の 1 元は 14 円位であった。

牛乳の出荷先

牛が到着して分娩が始まり、牛乳を搾ようになる前にその牛乳を出荷する乳業会社をあらかじめ決めておかなければならない。中国の有名な大手の乳業会社は 5~6 社あるが、その他にも各地域に地元の乳業会社が結構たくさんあった。青島から烟台の間に 8 社ほど見つかった。その中から牛乳を欲しがっている数社とこちらの条件に合う会社に的を絞り、売渡し価格の交渉に入った。また、私達の牧場では独自に牛乳運搬用のタンクローリー車を用意した。一度に 10 t が積めるステンレス製の車一体化のタンクローリー車である。私達の牧場だけの牛乳、他の酪農家の牛乳が混ざらない品質の良い牛乳を供給したかったからである。決まったのは新希望琴牌と言う会社であった。ニュージーランドから来た牛の分娩が 6 月から始まり、牛乳の量がある程度まとまった 7 月 13 日に待望の初出荷となった。私にとっても初めての経験である。自分たちが生産した牛乳が売れたのである。その出荷前まで搾っていた牛乳は牧場で働いている従業員に分けていた。彼らにとっても無調整の牛乳を飲むのは初めての経験であっただろうが、おいしいものは誰にとっても同じで、欲しがる人で取り合いになってしまった。その分配も乳業会社へ牛乳を出荷するようになって終了となった。乳業会社の入札制度は、その後、毎年行っている。翌年の 2008 年 6 月に再び入札が行われた。山東省にも大手乳業会社の工場があったのである。中国の大手という、蒙牛、伊利、三鹿があり、さらに北京を中心とした三元、上海を中心とした光明がある。それぞれの乳業会社も中国全土への事業拡大をねらい、各地に日量 400 t 前後の牛乳を処理できる工場を建設している時期であった。この年の入札には大手の乳業会社が加わった。数回の調整の結果、この年は最終的に三鹿乳業に決まった。しかし、9 月にとんでもないことがこの三鹿乳業を震源地として発覚したのだった。いわゆるメラミン事件だ。2008 年 9 月中旬三鹿乳業製の粉ミルクを飲んだ子どもに病気が出ているとニュースが流れた。最終的にこの粉ミルクを飲んだ幼児が腎不全を起こし、数名の死者が出てしまい、三鹿乳業は営業停止、会社は解体されてしまった。その結果、私たちの牛乳も出荷先が無くなり、急遽、取引先を探す羽目となってしまった。ようやく前の出荷先の乳業会社である新希望琴牌をお願いして、同社に決まった。この入札とは別にわれわれの牛乳は 2008 年 6 月にわが社独自の牛乳工場が

出来上がり、そこから私達の牧場で搾った牛乳だけを使用した製品を販売し始めた。独自の乳業会社を作る構想はこの事業を開始した時からあり、夢でもあった。一日の牛乳処理能力は 3 t と中国の大乳業工場は比較にならない小さな工場であるけれども、私にとっては自分たちの牧場の乳牛から搾った、無調整の牛乳が製品となり、皆に飲んでもらえて、おいしいと言ってもらえることは夢であり、最大の喜びだと思っていたので、それが実現した時はひとしおの感慨であった。この時はまさしく中国ではメラミン事件の真ただ中で、中国中が牛乳や乳製品の安全性に対し疑心暗鬼になっている真っ最中の時期であった。賞味期限は 14 日と短い中国に住んでいる日本人にとっては安心して飲めるし、一回飲んだ子どもがまた飲みたがるので、値段が少々高くても買ってもらえた。この牛乳はまず青島の日本系のスーパーマーケットで最初に売り出され、さらに上海、北京のやはり日本系のスーパーマーケットへと販売先を拡大していった。

従業員採用

農場で働く人を集めるのも新規に立ち上げる会社にとっては最初に始めなければならない重要な仕事である。中国に赴任して最初に雇用したのは日本語を話せる中国人通訳であった。現場で働く人間は最初の年のサイロ詰めの際に仕事をした近在の住人を雇った。牛が来て、酪農の仕事が本格化する前に職員を採用することになった。その採用者はサイロ詰め時に真面目で一生懸命働いていた人から選んだ。この辺りで仕事を得心としても、正社員と臨時工（パート）とでは待遇に雲泥の差がある。正社員は会社の食堂が使えて、仕事は週休二日制となっているし、四金、五金と言って養老保険（年金）、医療保険、失業保険、積立金や生育保険などの社会保障制度も受けることができる。人員が落ち着くまでには 1 年以上かかった。

獣医師や専門職の採用

会社の設立時から、私の職業柄、獣医師の資格を持つ人間が欲しかった。募集はインターネットで行った。応募者の学歴を見ると、獣医師は中等専門学校卒、高等専門学校卒があり、さらに獣医師の大学卒業生がいた。在学期間も各専門学校は 2 年制、3 年制、大学は 4 年制、5 年制があると聞いた。しかも中等専門学校には中学卒、高校卒で入学でき、高等専門学校は高校を卒業した人が入ることになっている。その為、獣医師と言ってもまだ 10 代の人もいれば、23、24 歳の人もいる。彼らの獣医師としての知識の差、技術の差は当然あるのだろうが、どうなっているのか私には分からなかった。そんな中、中国政府は 2010 年から獣医師の国家試験制度を開始した。その第一回の獣医師国家試験が 2010 年 10 月に行

われた。面接の結果、二人の獣医師の採用者が決まった。一人は約 1,000 km 離れた湖北省の武漢の出身で武漢の近くで働いていた大学の獣医科を卒業した 30 歳弱の男性であった。もう一人は 20 歳にならない黒竜江省出身者の男性であった。彼は中等専門学校卒であった。さらに、授精の仕事任せのために獣医師を一人採用した。採用した彼はすでに 3 年ほど青島にある牧場で働いた経験があった。その牧場はカナダの会社が出資して受精卵移植で優秀な乳牛を増やし、中国国内の大きな牧場へ育てた乳牛を売る仕事していた。雌雄判別の凍結精液も使い、雌の牛を増やしているとのことだ。人工授精師は牛を妊娠させて、その牛は分娩を繰り返す。それによって泌乳が再び増加する。人工授精師は牛乳の再生産を担う最も重要な役目がある。だから牧場の将来は授精師の腕にかかっていると言っても言い過ぎではない。授精においてもう一つの大事な仕事は 1,000 頭にも及ぶ牛の中から発情している牛をまず見つけだすことである。彼にとっては、この発情発見がまず重要な日課となる。以前は牛の行動や挙動の注意深い観察だけだったが、今は便利な発情発見のための補助器具（万歩計）があり、前より発情発見は楽になった。中国にも種牡牛センターが各地にあったが、私はアメリカの凍結精液を使用した。1 本のストロー価格は中国精液の 80 元前後の価格に比べ、約 4～5 倍の価格であるが安全性、牛の改良を考えれば、アメリカの凍結精液を使う価値はあった。フランスやドイツなどのヨーロッパの精液は中国に代理店があり使うことができだが、欧米に比べ断然近い日本の精液は使えなかった。獣医師は、その後入れ替えも含めて、診療担当の男性 4 名、授精担当 2 名、搾乳担当男性 1 名、薬品、検査担当の女性 1 名と大所帯となった。いくら私が獣医師で獣医師が好きだと言っても、これだけの人数を雇えるのは獣医師の給料が安いためである。もう一つ大事な仕事にデータの入力、管理があった。その人材が必要であった。その一人は武漢から来た獣医師の奥さんで故郷から呼び寄せてもらった。彼女も獣医科卒業であり、臨床の仕事の経験はなかったが、牧場で働いたこともあり牛に関して知識があったので働いてほしかった。牛に関するデータ管理は彼女の仕事となる。まずはその管理ソフトに 600 頭以上いる全ての牛の個体番号、名前、生年月日を入力することから仕事が始まった。それが済むと毎日毎日行われた治療や授精関係の処置をそのソフトに個体別に入力してゆく。子牛が生まれればさらに個体別のデータが増えてゆくわけで 1,500 頭になれば膨大なデータが蓄積されてゆくことになる。それらのデータは私が毎月の繁殖成績とその後の経営を予測して上司に報告する時に大変役に立った。

日常及び獣医師としての私の仕事

酪農部長の仕事は日々変わる繁殖成績のデータを集計して現状を把握し、問題点があれば解決策を各担当者に指示することであった。さらに先の生産予測を推計して事業計画も立てた。牛のエサは飼料計算を行い飼料設計した飼料を飼料担当者に渡し、それに従った TMR 飼料を牛に給与してもらった。飼料給与に関して次の問題は牛の群別けであった。この仕事は意外と大変なことだと分かった。机上の群別けと実際に群を分ける作業の違いがありいつものように分けるかである。牛は簡単に言うことを聞いてはくれない。牛のエサに関しては掃き寄せ係を雇い、1～2 時間おきに散らかった飼槽のエサをかき寄せてもらった。私は宿舎が牧場の入り口脇にあったので、毎朝飼槽の残飼がどの位あるかを見て回り、給与量を調整した。

牛は生き物なのでいろいろな病気が発生するし、思わぬ出来事が起きる。疾病管理では 2008 年 1 月全頭が分娩してから約半年後に育成牛も含めて全ての牛の鼻腔スワブによる BVD-MD の検査を行った。その結果、一頭の免疫寛容の持続感染牛が見つかった。この摘発はその後の牧場経営にとって重要なことであった。中国では口蹄疫は常在しているので年間 2～3 回のワクチン接種が義務となっている。当牧場もそれに従ってワクチン接種をしていたが、2010 年 5 月に若齢子牛とオスの肥育牛に流涎と口腔粘膜に潰瘍が見られる牛が発生して処分した。その処分に苦慮した苦い思い出である。2010 年 10 月には乾乳牛が入っているパドックで牛が続けて数頭死亡した。余った青刈りのトウモロコシを飼料係が親切のつもりで給与したと報告があった。死亡牛を見たところ可視粘膜は蒼白で、外陰部にはチアノーゼがあり、血液や給与飼料を青島農業大学で検査をしたところ診断とおり硝酸塩中毒と判明した。一頭目で診断できていればと悔いの残る事例であった。その他、柵にもうけられているマンスルーという人間が横向きで通れる隙間に大



図7 マンスルーに挟まった牛

きな牛がお腹の部分で挟まり動けなくなるなど予想外の事故もあった(図7)。とにかく病気や事故があったが2007年5月に398頭だった牛の頭数が2007年10月にはAU牛とNZ牛の産んだ子牛で総頭数が868頭になり、その後順調に頭数が増え2010年8月には経産牛846、育成牛669、計1,515頭の大所帯となった。私は2011年3月で退職となり、日本人の後継者が後を引き継いで、5年間の中国駐在を終え4月に帰国した。

夢に終わった3,000頭牧場経営

帰国後3カ月経った2011年の7月に中国人の通訳から連絡が入った。農場を作るのでその中の畜産部門を手伝ってくれとの誘いだった。萊陽の朝日緑源牧場に来たことがあり私が退職したことを知って、新規の会社に来てくれとのことだった。その会社は華光現代農業發展(江蘇)有限公司と言って何莉莉(琺琺)女史が社長であった。彼女は1965~1988年にかけて香港の映画スターとして活躍し、ご主人は香港最大の港運会社の董事長であった。歳は私より一つ上であったが若くて近寄りたがたい美人でまさに光り輝いている人であった。その人が南京市から北へ約130 km離れた田舎の江蘇省盱眙県穆店郷に1,000万m²(1km×10km)の荒地を開拓して国際的で近代的なハイテク有機農業を作る目的で2011年9月に現代農業開發有限公司を立ち上げた(図8)。とてつもないお金持ちの夢である。その計画の一環として牛を3,000頭飼育するからと協力を依頼された。畜産以外の事業は順調に進んだが、最終的に畜産の許可が市政府からおらず2015年3月に私はお払い箱となった。



図8 農場建設予定で整地され植林されたメイン道路

しかし、その4年半の間、私は3,000頭の牛が飼えると思いをはせ、肥育牛舎、搾乳施設の設計、開始した時の準備のために従業員用の各種作業マニュアルを作成、通訳と一緒にそれらの中国語版も作った。酪農技術、肥育技術を改めて学びなおした充実した生活でもあった。

最 後 に

臨床獣医師の技能を生かして外国で生活を経験した。現地の人達と生活習慣は違って戸惑うことがたくさんあったが、外から日本を見ることもできた貴重で思い出に残る体験であった。

今回、このような執筆の機会をいただいた日本獣医師会に感謝申し上げます。